



赤羽別院報 第15号

発行所：真宗大谷派 赤羽別院 親宣寺
発行人：浅野 怜
愛知県幡豆郡一色町 赤羽上郷中14
Tel.Fax.(0563)72-2308
印刷：(株)エムアイシーグループ

この度、赤羽別院の新輪番に浅野怜氏(第十四組専興寺住職)が就任されました。赤羽別院には共同教化の拠点としての役割が求められる一方、地盤沈下も著しく、そんななかでの船出は、多くの困難が予想されます。多方面より氏の手腕を期待する声が寄せられるなかで、率直な思いをお聞きしました。

—ご苦労さまですね。今の心境は？
九月十三日に本山宗務所へ行って、熊谷宗務総長より辞令(任期四年)と輪番娶姿を拝受しましたが、あらためて事の重大さを痛切に感じました。



浅野新輪番熱く抱負を語る

『西尾碧南幡豆の門徒教化の拠点に』

ものにしなさいという意味だと受け止めています。それと、私自身崇教区域の一員として、伝統ある赤羽別院をこのまま放置するわけにはいかなないと

いう思いも強くあって、拝命することとしたわけです。—やらねばならないことは沢山あるかと思いますが、まず何から取り組まれますか？

かったと思うのです。まずはそこからです。そして、一刻も早く教化センターを立ち上げなければなりません。そこで真つ先に取り組むのが報恩講です。報恩講には全ての問題が集約しているからです。崇教区域内には声明に秀でた人が沢山見えますから、是非とも大勢協力を願おうと思います。また雅楽のできる方もみえますので、やはり協力をいただき、別院らしい荘厳な法要にしたいと思えます。各寺から

は助音する人を送り出していただき、団参もお願いしたいと思っています。他にもいっぱいあります。まずは身近でできることを一つひとつ具体化して行こうと思っています。

います。一万戸とも云われる門徒さんと関わりが持てるような働きかけをしてこなかったし、手立ても講じてこなかった。鬼に角、別院へ足を運んでいただけることを考えなければなりません。—どんな別院を目指されるのでしょうか？

—最後にひとこと。私自身多くの人に援けていただいたお陰で、今日まで曲りなりにもやってこられました。今後は少しでも皆さんのために恩返しをしたい。そして歴史ある赤羽別院の火を消さずに、立て直すために骨を折りたいと思っています。そのためにも崇教区域内のご寺院には、是非とも力になっていただきたい。

崇教区域にはふさわしい人が沢山みえるなかで、敢えて私がその任に就くのは、責任役員として提案してきた別院活性化策を、現実

先日も彼岸会に向けて院内のミーティングをして、役割分担を話し合いました。今までややもすると責任の所在がはっきりしていない

—今までどこに問題があったとお感じですか？
単なる前年踏襲が多かったと思

—是非とも力になっていただきたい。

公開講演会

九州大谷短期大学学長 古田和弘 師

今、いのちが あなたを生きている



阿崎教区が赤羽別院で5月18日に開催した公開講演会のほんの一部ですが御法話を抜粋し、ここに記事として掲載させていただきます。(智)

阿弥陀さまの名前をなぜ、無量寿というのか、無量寿如来と「いのち」という字です。寿命と

いうでしょう。これ自体がいのちです。それで、無量ですから、これを「限らないいのち」というふうに現代語に翻訳される方がおられる。それは間違いいではないだろうと思います。でも、あまり正確ではない。限らないいのちという言い方は、ちよつと正確じゃないですね。

どうしてかという、量を限りと読みますから、限りがないというんだつたらね、中国語ではちよつと違うんです。「無有量」これだつたら、限りあることなして。これは(無量寿と)違うでしょう。どういふことかと言つたらね、結論的に申しますと、分量に関係がないということなんです。量に関係がない、つまり、長さに関係がない、長さに関係のないいのちということなんです。

それを、私たちの方に引き寄せて考えてみると、私たちは、長さに関係のないいのちを生きているんです。私たちは、長さに関係のないいのちをいただいて生きておるんです。

さっき言いました、命濁という、命が汚れておるといふ、いのちの意味が見失われているという意味は、あれは生き物として持つておるいのちですよ。

ところが、長さに関係がないのちということ、どういふことかと言つたら、たとえ私が生まれて一年後に亡くなったとしても、一年間、見事に生かせてもらったと、そういういのちがある。一年間で、いのちは完結したわけじゃないと、いのちは完成しなかつたということになります。

そういう意味で、長さに関係がないといういのち、要するに、長いとか、短いといえない、量ではかれないものだ。つまり、いのちそのものということです。

親鸞聖人は、「帰命無量寿如来、南無不可思議光」とおっしゃる。南無不可思議光の方は、智慧の問題です。阿弥陀さまのお名前は、長さに関係のない寿命であると。

阿弥陀さまのお名前は、長さに関係のないいのちであるとい

うことはどういふことか。

阿弥陀さまのいのちが、もし長さに関係があつたら、いつか終わるわけですよ。どんなに長かつたって、いつか終わるわけですよ。

だけど、いつか終わってしまったら、その終わつたあと、阿弥陀さまのいのちが終わつた後、生まれてきた人間は、阿弥陀さまの教えに遇えないわけですよ、本願に遇えないわけですよ。それじゃあ、いけないわけですよ。

だから、いつとだけだけの人間が生まれてくるかわからないわけだから、阿弥陀さまのいのち、寿命は、長さに関係があつてはいけないわけですよ。そういう「いのち」なんですよ。

《趣旨抜粋》

赤羽別院

眞宗講座案内

●講師 安藤智彦師

●内容 正信偈

●日時 毎月一回

(十一月七日・十二月十五日)

第八組のページ

青壮年の集い・同朋教室③

今年度から中村薫先生(同朋大学教授・一宮市養蓮寺住職)をお迎えし、青壮年の集い(心の診療室)と同朋教室を開催致しています。また、八月十八日の夏季講習会では、午前・午後・夜と三回の長時間に亘って小野蓮明先生(大谷大学名誉教授)を講師に迎え、『真宗われらの大地―越後流罪八百年に憶う―』を講題にお話をいただきました。当日は残暑きびしい日にもかかわらず、各地より大勢の参加がありました。



■ 正信偈からの学び

青壮年の集いの第一回は当日、予想外の台風の影響により、残念ながら中止となりました。よって、第二回より中村先生を迎え開催の運びとなりました。



日常生活の出来事を通じて親鸞聖人の歩まれたお念仏の道を『正信偈』から学び、お念仏の教えを通して、「人生の一大事は何か」を訪ねていきたいという開催趣旨のもとに始まりました。

■ 解と行

正信偈を唱っていると、どういふ意味なのか知りたくなる時があったと思います。それを中国の『善導』という人は学ぶのに**解学**と**行学**があると言っています。**解学**とは謂れを理解・解

釈することが大事なんです。でも、それだけでは私達の心が救われていきません。**行学**とは実行・行動に結びつく学びです。

仏教の教えは、この解と行の両方がある訳です。「**行は必ず解を要求するけれども、解は必ずしも行を要求しない**」というのです。解釈だけ幾らしても、日常生活からかけ離れた砂上の楼閣のように脆い観念で終わってしまうことがあります。その中で念仏の教えは**行が大事なんです**。**行は何か**といえ、それは生活の中にあるのです。仏教の教えがあつて、それで生活がでてくるんじゃないやなくて、生活そのものに立脚したところに仏法があるのです。但し、現実の生活に流されていくことではないのです。しかし**真理を離れた現実はないし、現実を離れた真理は観念ですから身に應えてこない**んです。その中で**正信偈では信**とはあるけれども、**行**を含んでおり、それが**南無阿弥陀仏**です。

(文責・伊奈 恵祐)

第八組行事紹介

《青壮年の集い》(心の診療室)

七月十四日 安楽寺

(台風接近の為、中止)

八月十八日 慶昌寺

八月二十八日 宿縁寺

十月六日 専念寺

一月十九日 懇親会

◆ 毎回午後七時半より

《同朋教室》

八月十八日 慶昌寺

九月十三日 宿縁寺

十月五日 来空寺

十一月十日 浄願寺

十二月九日 福正寺

◆ 八月は午後一時より

九月以降午前九時半より

《少年少女の集い》

七月三十一日

行先 中山道・赤沢

自然休養林

第九組のページ

みなさんは「往生浄土」と聞いて、どんなイメージをお持ちになるでしょうか。「往生」とは、「死んだら天国に行くこと」とお思いでしょうか。はたして本当にそうですか。(昌)

人間が人間であつたために



昨年幡豆郡幡豆町東幡豆福泉寺にて行われた第九組の夏期講習会は、二日間に渡り元大谷大留学長寺川俊昭師を初めて講師にお招きして、『往生浄土をめぐって』という題で講演を頂き

ました。

講演の趣旨は、親鸞聖人が「往生浄土」について、どのようなご理解をお持ちであったのか尋ねていくというものでした。

我々は日常生活の中で、あたり前のように「往生浄土」等の仏教用語を使用しています。当然その意味について理解しているつもりでいます。しかしはたしてそれは正確に意味を理解して使用しているのでしょうか。またそれは親鸞聖人のご理解に添って理解し、使用しているのかなど様々な指摘を受けながら確かめているのかどうか尋ねていったことでありました。

まず、寺川師の指摘は次のようでした。広島市内の仏教に感心のある有志の方々が、「往生浄土」について住職にお尋ねした際、一律にその回答が「死んでから極楽に行くことだ」という回答が繰り返され、不信に感じたこと。二十数年前、交通事故の孤児達が綴った本の題名が『天国にいるおとうちゃんへ』であったこと。また著名な宗教学者はその著書の中で「今は浄

土で眠っている親鸞聖人」と記述されているが、その方の浄土理解の問題。岩波書店発行の『仏教学辞典』の解説をめぐる問題。また「浄土往生」の問題をまとめて検証した研究誌の「極楽浄土にいつ生まれるか」という題名の問題。これら様々な「往生浄土」に関する問題の例を挙げ、一つ一つそれについて検証していかれました。

そのように様々な「往生浄土」は理解され、使用されていることをめぐって、二日間をとおして寺川師は次のことについて述べられました。

念仏往生の願の成就を説く『大經』の教えの中には「即時に往生を得て不退転に住するのである」との表現で往生の大切さが説かれてあります。信心を得た人は「ただちに往生する身となる」これを「大無量寿經」では往生を得ると教えて下さっていると話されました。これが往生は死んでからではなくて信心を頂いたときから始まるのだといわれた親鸞聖人の積極的なご理解

を決定的にした一言であります。

問題は単なる「往生理解」ではなく、「親鸞聖人独自の往生理解」を正確に尋ねることが大切だと強調しておられました。

我々は今、情報社会のただ中であつて、一般常識や社会通念に流される傾向にあります。しかし、本当にそのように理解しているのだろうか。常に検証できる冷静な眼を持つことが重要だと思えます。同時に親鸞聖人の独自の理解というものは、どのようなものかを問いつけることが、我々にとつて大切な課題であることを、あらためて教えていただきました。(文責 大溪昌寛)

第九組行事紹介

《組内報恩講》

日時

平成十九年十一月十二日(月)

午後二時

会所 正覚寺

講師 山崎 秀健 師

本山瓦ものがたり

— 明治時代の偉業 —

志貴野製瓦場の開場

(その五)

■製瓦場内の示談所

明治十四年七月、製瓦場開場当初から製瓦場内にあるそれぞれの建築物の規模や使用目的が示された『御影堂製瓦の館の建築法』の記述を碧南市史料調査室の鈴木康雄氏に読み解いていただいたところ、(中略) 窯並木松葉置場 六百坪

飯食所並事務扱所

一、五間ハリ八間

四拾坪

風呂場付家ヲ置ク

(中略)と記述されている。

■原文意識

瓦を焼く窯と火を焚くために必要な木材や松葉などの置き場として六百坪の敷地を確保し、

五間梁八間、建坪が四十坪の風呂場を備えた家屋を置いて仕事をしする人が食事を摂ったり、事務職を執り行っていた。

■示談所内の様子

『御影堂製瓦の館の建築法』に見られる「飯食所並びに事務扱所 五間梁八間 四十坪」から、製瓦場内における事務職を司る所として機能を果たしていたことがわかる。

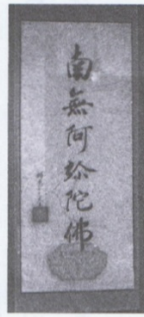
また、事務扱所が示談所としての機能を併せ持ち、事務所内に第二十一代門首殿如上人揮毛による一貫代の大きさの六字名号本尊をお奉りして、朝夕のお勤めやお説教を聴聞していた。

■六字名号本尊の行方

開導新聞によると、明治二十年二月下旬には、製瓦場において職工を解雇し、閉場式を行い翌月には残務を整えて場内の建物を残らず取り払う予定とある。また、良興寺老院の三浦教照師の資料によると明治二十三年幡豆郡吉良町富好の地に真宗のみ教えを聞く富好説教場が開創

を控えていた。

説教場建立のために土地を寄進した水鳥長兵衛氏は、製瓦場の仕事をしておられた方で示談所に奉られていた六字の名号本尊を富好説教場のご本尊として迎え入れることを願い出られた。



説教場は間口七間の本堂であったが、三河地震によって倒壊した後現在の説教場が建てられて木像のご本尊が奉られている。名号本尊は表装の痛みが激しいため、良興寺老院の手によって大きな額に納められ、現在は本堂右側面に安置されている。

■製瓦場跡地に記念碑建立

明治二十二年、製瓦場内の本山出張所の跡地に記念碑が建立された。

記念碑の碑文は楠潜龍師の撰文で東南賢師によって書かれ、題額は占部観順師の揮毛である。

残念なことに三河地震によって長い間損傷が激しい状態にありましたが、昭和五十七年「志貴野製瓦場記念碑保存会」の呼びかけとご門徒の懇志により、記念碑修復と二度の移転整備が行われた。

昭和三十三年六月、本山より「志貴野製瓦場跡」について「屋根瓦を製造した窯跡で宗史と深い縁をもつものであるから荒廃湮滅(いんぼつ)に帰せぬよう大切に保存することを囑望する」とある。

碑文の終わりに、「我が法堂を護り、聊か祖徳に報ゆ」とある。今日私たちは、宗祖としての親鸞聖人に出遇いを果たしているだろうか。

(文責 三村 謙忍)



製瓦場記念碑

第十一組のページ

北風と太陽

浄林寺住職 新田智則

「ある時、北風と太陽はどちらが強いかを言い争った。双方ともに譲らず決着は着きそうになかったが、ちょうど一人の旅人が通りかかった。あの旅人の服を脱がせたほうが勝ちにすると決め、まずは北風からはじめた。簡単に吹き飛ばせるだろうと風を吹き付ければ、旅人は寒がって服をしっかりと押さえてしまう。それならば北風は、さらに強い風で吹き飛ばそうとするが、寒さに耐えかねて旅人は重ねて服を着る始末。さすがの北風も疲れ果てて、太陽に番を譲った。

太陽は穏やかに照りつけ、旅人が服を脱ぐのにあわせて、だんだんと雪へしていくと、とうとう旅人はあまりの雪をこき素っ裸になって川に飛び込んでしまったぞうだ」(『イソップ物語』より)

ありもしない見栄や様々な欲という名の服を着て、あてなき旅をしている私たちは、北風の吹いた風よりも、もっと厳しい現実と直面しているのではないか。それに対して、私たちは「自分は間違っていないから」と欲の上に欲の服を着さらに着る。自分が間違っていることを他人に教えられるのを嫌がって、今まで以上に我がままで、頑固になってはいまいか？

そんな旅人の私たちに「南無阿弥陀仏」の六字の御名を称えてみなさい、称えておくれ」と声をかけてくるのは、太陽の阿弥陀如来に他ならぬ。「私の名前を呼ぶならば、一人残らず、漏らさずに救ってみせよう、助けてみせよう」と慈愛に満ちた照りつけは、かたくなな我欲の服の無意味さを論ず。全てを脱ぎ捨てた無力な私たちを、やさしく力強く包み込む。まるでわが子を慈愛で抱きしめる親のように。それが「南無阿弥陀仏」の六字の姿、私たちには阿弥陀如来と親鸞聖人のお姿にはみえまいか。

第十二組のページ

小焼野町了願寺に於いて滋賀県から小林光麿師をお迎えして、真宗講座が行われました。

講題「自力と他力」

如來、我となる―法藏菩薩の降誕

自力の心とは、「私が苦勞してきた」「私が道を求めている」というように、自分を立場にして考えたり行動したりすることをいいます。これを自力我執とも仏智疑惑ともいいます。仏さまのお心がわからないからです。「私が……」と、いちいち意識しなくても、口で言わなくても、自分を立場にしている心が、私たちのこのころの奥底に根づいています。

しかしこの自力の心が駄目だというわけではありません。むしろ自力の心ではどうすることもできないのだ、という鉄壁(行きづまり)を自覚することによって、はじめて自力無効という体験をすることができま。この体験は、自力を尽くした人

においてはじめて体験することができるのであって、努力(自力)をしない人にはわからないことでしょう。しかしその時はじめて「他力」というものを自分の内面に感得することができま。

そのことを清澤満之先生は絶筆「我が信念」に、「なかなか



自力の捨てることは容易ならぬことであった。けれども自分はずいに自力の(心の)間に合わぬことが明らかになって、そこに如來を信ずるといふことに落ちつくようになった」といわれ、あるいは「人間の有限相對(自力の心)の終わったところ」に絶対他力が始まる」といわれ

ています。

したがって、自力の心ではどうすることもできない、という自力の妄念が破れて、はじめて「他力」を感得することができるのであるが、それにはそれに先だつて自力(の心)を尽くすということがなければなりません。

私たちはすぐに「他力だ」「他力だ」といつて、「自力」は否定すべきものであると聞いてきました。自力を尽くさずして、どこに他力がありましようか。

「他力」ということを体験的にいえば、私ではないものが私を歩ませていることを、私の内面に感得することです。私の外にはありません。

そのことを曾我量深先生は、しばしば『成唯識論』という本に、仏さまは我われ衆生を「撰してみずからの体(肉体)として、(衆生と)安危を共同す」と記されている言葉を引用されて、仏さまのご苦勞を教えて下さいました。

この仏さまとは法藏菩薩という仏さまです。法藏菩薩という

仏さまは、我われ衆生の宿業そのものとなって、「安危を共同す」とは、迷うも覚るも衆生と共にする、そういう仏さまです。いいかえれば、寝ても覚めても「私が……」「私が……」といっている私と共に迷うてくださる仏さまが法藏菩薩という仏さまです。そういう仏さまが私たちの心の深いところ(アラヤ識という無意識界)に私と団体してまします、ということを知らなければ、もったいないことです。そして私たちが自力の心ですうすることも出来なくなつた時、私の足もとをふりかえりみれば、私でないもの(私と団体される法藏菩薩という仏さま)が私を歩ませてくださいたいのだつたことを感得することができま。

このことを親鸞聖人がご体験されて、「他力とは如來の本願力なり」(『教行信証』行巻)といわれ、あるいは、蓮如上人は「燈台もとくらし」(御一代聞書一二九)といわれ、曾我先生は「他力とは如來の因位(法藏菩薩)の本願力なり」といわれています。

第十三組のページ

門徒会座談レポート⑥

「本山に上山して

感じたこと」



A 上山してみて私は何もかも
びっくりすることばかりでし
たね。

B 特に僕は瓦が本当にすごい
と思いましたね。

C そうですよ。西尾の志貴

野で作った瓦を平坂まで運んで、そこから舟で大阪まで運び、そこからまた京都に運んで、それを葺き上げたわけですよ。それを思うと「すごい」の一言だね。

D 今でこそ車やいろいろなものからいいけども、昔は人の手間でやったんですよ。本
当に頭が下がりますよ。

E 私はね、上山奉仕というの
もどういふものか良くわから
ないまま参加したんですけ
ね。本山の建物なんかを見て
おると、みんなの信心とい
うか、大きな願いが集まっ
てはじめて、できたと思うの
ですよ。関わった人たちのし
た気持ちは、決して忘れては
いけないと思いましたね。

F 本山の建物を見て、やっ
ぱり日本の木造建築は最高だ
なと思いましたよ。

G 私は上山奉仕というものは
男の人ばかりが参加するも
んだと思っておったけど、来
てみると私のように女の人が

けっこう多かったもんで安心
しました。とつても楽しかつ
たですよ。知らないでいる人
も多いいんじゃないですか。こ
れからもこういうことに誘い
あつたらいいと思いますね。

H 私は何度も上山奉仕に来る
んですが、そのたびに思うこ
とがあるんですよ。誰もがそ
う思うかもしれないですが、
東本願寺の中で寝泊まりして
過ごしてくると、遠い存在で
あつた本山の敷居というか壁
が取り払われていくような気
がするんですよ。自分たちの
本山なんだと思えるようにな
るんですよ。

I 次に本山に行く、今まで
とはまるで違う感じがするん
でしょうね。

H 私の本山なんだという、
そういう気持ちは、中に泊ま
って、お勤めに参加して、雑
巾がけをしてと特別に感じ
ますね。上山奉仕に参加し
た人には味わえないことか
も知れませんが。

C いつもの好き勝手な生活か
ら離れて、親鸞聖人のもとで
折り目正しい生活をするこ
とで、心持ちが変わるんでし
ょうね。そういう事があると思
いますよ。

E 実は、今回誘われた時、ど
うしようかと思いましたけど、
やっぱり来てみて本当によか
ったなと今思っております。

レポーターの感想

今回の座談会は、組門徒会の
方々が参加者を募り、本山に奉
仕団(九月十五、十六日)とし
て行かれた時の座談会を、後日
テープを聴いてレポートにま
めてみました。本山の修復現場
などを見て大きな衝撃を感じ
られたことが伝わってくるテー
プでした。もう一度上山奉仕に参
加してみたいという意見がすご
く多かった。出かけるまでが大
変ですが、行ってみたら、是非
もう一度、と云える本山であつ
てほしいと私も思いました。

(文責 伴 仁志)

第十四組のページ

シリーズ 親友 ⑥

心の元氣塾で出遇った仲間たち

辻 正三さん 心の元氣塾が始まる前のブロック修練場の頃より、長きにわたり聴聞の場に足を運ばれている。

法名 釋 宝樹 (ほうじゆ)

—心の元氣塾に関わられたきっかけを聞かせてください。

元氣塾に入る前から、ずっとお寺に関わっておりまして、その前身のブロック修練場というのがありまして、三組(第十四組・第十五組・第十六組)合同で開催されていたんですが、その頃からのご縁です。

修練場は、今と違った雰囲気、組を越えていろんなお寺に顔を出せて、とてもよかったです。今でも、その人たちに会うと親しく話ができますね。

そもそのきつかけは、住職から、「青壮年の聴聞の場があるから、あんた、ちょっと参加してみないか」と言われて、「それじゃあ、何にもわからないうですけど…」ということになりましたのが最初です。

—元氣塾に関わって、今までの考え方とか、あるいは生活とか、何か変化というか、変わったことはありますか。

はつきり、関わる前と違うのは、仏法の話ができる仲間ができたということですね。これが全然、違いますよね。



今の元氣塾の仲間でも、元氣塾を開催するときにしか集まら

ないんですけど、本当にもう何というのか、話が尽きないくらい話ができるというのが不思議ですよね。年齢の差もあるし、職業も違うけれども、心底語り合えるいい友達ですね。

—元氣塾に参加される皆さんそれぞれが、違う考え方や、とらえ方を持っていて、そういう意見を聞くことが、私にとってもとても新鮮に感じるところです。やっぱり自分の考えを持って、これは正しいと思つて、凝り固まつてしまうと、何か、それが逆にいうと危険というか…。

いろんな人の意見があつて、「ああだ、こうだ」と言つて、「ああ、違うものだなあ」つて考えさせられることがいいというか。かえつて、みんなが同じ意見ばかりだったら、気持ちが悪いですよね。

しばらく前に、米沢英雄さんという人の本を集めて、一生懸命読んでいたことがありまして、結構その内容に「そうだ、そう

だ」といつて、勝手に納得していたことがありました。そんな時に、元氣塾でも講師をしていただいた荒山淳さんと、米沢先生の本の話をすることがありました。

ある時、別の会場で荒山さんの講義を聞きにいった時に、何十人という人の前で、話をされていたんですが、その時に本を読む危険ということをおっしゃっておられました。

「本を読むのはいいんだけど、読んだ人の理解だけでものを判断しちゃうから、やっぱり、そこで友達が集まつて、ああでもない、こうでもない、これは違うぞというような話をしないとイケない」ということを、ズバツと言われたことがありました。ああ、僧伽(サンガ)と、いうのは、そういうものなのかと、教えられた気がしています。

(二〇〇七・八・二十六)

聞き取り 竹内勝宏
編集 安藤智彦

【門徒のたしなみ】

お齋 (おとき)



各家庭で勤まるご法事や、寺で勤まる報恩講、永代経祠堂法要にお参りしますと、お齋をいただきます。簡単に云えば、法要時にいただく食事のことです。しかし、単に食事の時間になったから食事を取るということではありません。勤まった法要とお齋は、一つつながりのことと考えるのが適当でしょう。

生きものにとって最も重要なことが「食」であることは、いうまでもありません。その場合、人間は単に食べるのではなく、無数のいのちを背景として生かされていることを確かめることがなければなりません。

法要で仏さまに礼拝し、ともにお勤めに励みます。法話を聞いて、生かされている仕合せを感じながら、お念仏を申します。そしてお齋をいただきたい、身に受ける喜びを、実感し、感謝の心で頂くのです。
(文責小谷)



A&Q

Q 何故、お文を拝読する時、拝読者は横回りに転座をしますか？

A お文をお書きになったのは、蓮如上人で、その教えを参詣者と共にいただくという意味で横回りに転座し拝読します。

お内仏で拝読する作法も、本堂での作法に準じて行います。蓮如上人の御影または九字名号のある尊前に御文が位置するように右側を向いて座り、御文を拝読します。仏間の構造上、本堂の作法を行うことが難しい場合は、拝読者にその判断が委ねられます。
(文責 小栗)



赤羽別院報恩講

十一月十四日、十六日

十四日 (午後) 渡邊愛子氏
十五日 (午前午後) 本多良友師
十六日 (午前午後) 裏輪秀峰師
是非ともご参詣下さい。

別院人事

●新輪番着任

去る九月十一日付にて第十四組

専興寺住職浅野怜氏が赤羽別院輪番に着任されました(任期四年)それに伴って、出雲路善公(岡崎教務所長)輪番事務取扱は退任されました。

●責任役員に平野氏

浅野氏の輪番就任によって空位になっていました責任役員に、第十一組正念寺住職平野真氏が就任されました。

●教化センター主幹に藤原氏
地域教化センター主幹に第十組厳西寺住職藤原肇氏が就任されいよいよ本格的に教化センターが実働いたします(センター長は輪番が兼務)

●会計人事(交代)発令

長年別院会計職を務めていただいた石原豊子氏が退職、新たに服部敏治氏が任命されました。

編集後記

待ち望んだ別院の新体制が整い、時代にあつた、魅力ある別院が期待できそうです▼「赤羽御坊」も次号から新スタッフにより、新体制にて刊行されますので、ご期待ください。(小谷)